

林寺報

『ないおん』誌の
11つの記事



〈その1〉

9月の第一土曜日、早朝私は長岡市へ向かいました。保育研修会に参加するためでした。東京で新幹線を乗り継ぎ、約一時間半で長岡駅につきました。

強い日差しが駅前広場に降り注いでいます。建ち並ぶビルがコントラストを描き、初秋の涼風が額の汗を拭って行きました。

歩道のあちこちで、「米百俵」の昇り旗を目にしてしまった。

(なるほどここは、戊辰戦争で歴史に名を残した街なんだ)

明治のはじめ、長岡藩は薩長連合の新政府軍に熾烈な戦いを挑みました。そして激しい抵抗も空しくついに城は陥落しました。その後押し寄せた食糧不足が人々の生活を苦しめていました。

そんなおり、見舞いとして百俵の米が届けられたと云います。大参事だった小林虎三郎は、その分配を迫る人たちに、「國が興るのも滅びるもの、街が榮えるのも衰えるのも、ことごとく人にある。この百俵を基にして学校を建てたい。この百俵は、今はただの百俵だが、後年には一万俵になるか、百万俵になるか計り知れない」と皆を説得したと云います。

今日の少子高齢社会と、危機的な財政事情は、時代背景や内容こそ異なるものの、明治維新に匹敵する大きな改革を余儀なくされているようです。

例えば老人福祉では、すでに医療保険と組みして、介護保険の見直しが始まっております。障害者福祉も、現在の支援費は介護保険や医療保険との関連で検討されているようです。児童福祉は幼・保の総合施設や幼保一元化に向かう流れの中で、補助金の頭を揃えるとの方向です。

国の補助金を大幅に削減しその代わり財源の一部を地方に委譲するという、三位一体の改革が急速に進む中で、我が国の教育や福祉は、これからどうなっていくのだろうと不安になります。

苦難の時代に汗と忍耐は覚悟しなければならないでしょう。

しかし、それと同時に、長岡藩の「米百俵」に学び、地方へ委譲される貴重な財源ができるだけ教育や福祉に投じられるよう、これから改革に勇気ある提案をしていきたいものです。

子どもたちこそ未来への希望なのですから。

「ないおん」やすらぎの世界。涅槃。
宗門内で全国に幼稚園・保育所など幼稚教育にとりくんでいる先生たちの相互研修のための月刊誌です。

「生きる心」
宗門内で全国に幼稚園・保育所など幼稚教育にとりくんでいる先生たちの相互研修のための月刊誌です。

十月のこよみ (神無月)



「ないおん」やすらぎの世界。涅槃。

宗門内で全国に幼稚園・保育所など幼稚教育にとりくんでいる先生たちの相互研修のための月刊誌です。

「生きる心」
宗門内で全国に幼稚園・保育所など幼稚教育にとりくんでいる先生たちの相互研修のための月刊誌です。

生きる心

宗門内で全国に幼稚園・保育所など幼稚教育にとりくんでいる先生たちの相互研修のための月刊誌です。

十月のこよみ (神無月)

（神無月）



わたしのお念仏

「念仏が念仏する」

玉井 克彌

わたしは過日、大阪市立美術館において、「祈りの道—吉野・熊野・高野の名宝展」を拝観して参りました。

なかでも私に強い印象を与えたのは、一遍（いっぺん）上人が、あの紀州の山中で、念仏札を賦算（ふさん）する一幅の画像でした。その鋭い眼光、風貌。阿弥衣を着け、念珠と念仏札とを持つた立ちなど、それらすべては「三界無庵」の身として長い通路の旅をつけ、「捨て聖」の名に甘んじた上人みずから宗風の厳しさを垣間見る思いがしました。

その画像の上部に墨書きされた和歌

ほとけこそ いのちと 身との あるじなれ
わがふるまいも わがこころをば

南無阿弥陀仏

これは、上人が平素説いてやまなかつた「念仏が念仏する」ということばの真意を秘めたものであると感じた時、わたしは発する「となうれば」とばなくただ佇み

とお念仏するばかりでした。

その後、ある機会に、上人の次の和歌一首と申すほかなかつたのです。

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

ほとけもわれも なかりけり

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

ここに上人の「念仏が念仏する」ということばの極意があると考えれば、ただただ感概無量と申すほかなかつたのです。

（註）

一週忌智真・円照太師、時宗の開祖。

親鸞と同じく本願念佛を仰ぐが自らの力を奮って（念仏を称えて）念仏と合一しようとした。蓮如は子女を時宗道場に預けたこともあり、「正信偈和讃」をすすめたのはこの宗の影響かおつたのかもしれない

賦算（ふさん）=「札配り」「御化益」（ごけやく）などという。熊野神から「信・不信をとわず賦算すべし」にしたがい「南無阿弥陀仏（達摩。60才）」の念仏札をくはつた。

三界無庵=世界どにても私の住家はない。

佛教本来の無我の思想

捨て聖=平安時代末期の学僧了遍は「捨てこそ」と書いた仏教伝統の無我無処住。自我・自利を解脱することの難しさに先覚者は一

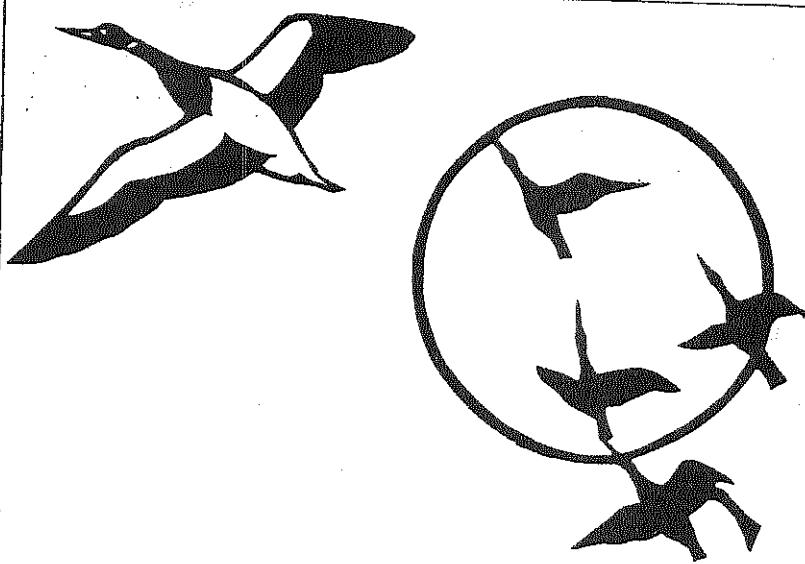
様に悩んだのだろう。我を離れてようとして一層我にしばられる場合もある

蓮如様は、「みんなが寄り合って談合しない。話し合い語り合うなかにみほとけさまのお慈悲に気づかれるのだよ」とおっしゃいました。うちの寺院家さんはご法話のまえに必ずお正信偈さまの親鸞さまのおことはをお唱えになります。「道俗時衆共に同心に」。（だれもだれもが心ひとつになっておみのりを聞き合いましょう）と。

ほとけさまのお慈悲と云うのは、マイトリともに悲しみ合う」と云う意味だそうです。

自分一人の利益ばかりを主張するのではなく。自分に都合のいい見方考え方ではなく。互いに己を後に、人を先に。人の憂いを悲しみ、辛い立場を思いやる。それが仏教の精神、それが仏教徒・念佛もうすものの、一番大事なところがけであるうかと思います。

この間の余での話し合いは、「祈り」と云うことでしたが、あるご年配のかたが「わたしの歳になるとよく祝辞や乾杯の音頭を指名されます。みなさまの健康をお祈ります」（会の発展を祈念して乾杯）などといつたあと、ああア、また祈つてしまつた。間違いだつたと反省するのですが、なんともへんな異常でして……。と云われました。



わたしたちの「てら」

カムフラージしている〈毒饅頭〉です。それは紛れも無く、この文章にある雑行・雜修・自力のところの最大のものです。

しかし、社会の平和・人々の平穡を、お互いに信じあうのは自然なすなおなところでないでしょうか。ほとけさまのお慈悲に目覚めましょうねと祈り合はず、これ当然のことではないかしら。親鸞さまもお手紙の中で「祈りあわせましょ」と書いていらっしゃるそうです。お念仏に敵対している人に対しても「かなしみ祈りあわせましょ」といわれたのが親鸞様・蓮如様であられたそうです。

わたしらのお寺には、総代会から始めて佛教婦人会・佛教社年会、ほかに連研の修了者の集まりである法輪会。そのほか毎月定期の「みのりを聞く会」などさまざまな会がありますので、一年中全体が活発に動いています。

役員の方々がとても熱心にはたらいでくださるので、一年中全体が活発に活動していると云つてもよいほどです。

蓮如様は、「みんなが寄り合って談合しない。話し合い語り合うなかにみほとけさまのお慈悲に気づかれるのだよ」とおっしゃいました。うちの寺院家さんはご法話のまえに必ずお正信偈さまの親鸞さまのおことはをお唱えになります。「道俗時衆共に同心に」。（だれもだれもが心ひとつになっておみのりを聞き合いましょう）と。

先ずまあ、こんなことがさりげらんに話し合えるそこが私の「てら」と感じです。

彼の山戸よりの熱い想いと感ずる頃



坂本智佐登